風は寒いか冷たいか

—温度形容詞とその用法について—

細　川　英　雄

はじめに
1　温度形容詞とその分類
2　「寒い」「冷たい」の用法
3　「寒い」「冷たい」の共存
3—1　「風」に関する場合
3—2　身体部位に関する場合
4　結論
おわりに

はじめに

日本語の形容詞の中にいわゆる温度形容詞と呼ばれる「あつい（熱・暑）」「あたたかい（温・暖）」「つめたい（冷）」「すずしい（涼）」「さむい（寒）」等の一群の語彙がある。この中には，たとえば，

水は冷たい。

とは言えるが，

＊水は寒い。

とは言えない，というような区別のあることが知られている。さらに，この「寒い」系（暑い・暖かい・涼しい・寒い）・「冷たい」系（熱い・温かい・冷たい）の各々の系統は基本的には混用されることがないということも先行の研究によって明らかにされている。

ただ，実際の用例を見ていくと，たとえば，

風が寒い／冷たい

のように，その区別の境界を越えて同一の語に関わるものとして共存している場合に出会うことがある。

こうしたいわば例外に該当する用法についてはどのように考えることが可能だろうか。また，それは温度形容詞の体系と分類の中でどのように説明されるべきなのだろうか。これは，温度形容詞の体系並びに諸語の意味規定に及ぶ問題であろうと思われる。

本稿では，「風」を形容する場合の「寒い」「冷たい」を中心に取り上げ，その共存現象がなぜ起こるかということを問題の提起として，温度形容詞の性格及びその分類について考えてみたいと思う。

1　温度形容詞とその分類

温度形容詞諸語の分類については服部四郎（1964）が「暑い」「熱い」の同音異義語であることを指摘したのを初めとして，いくつかの史的研究を含め多くの研究が行われている。ここでは現代語の「寒い」「冷たい」の規定に限定し，従来の指摘のうち主なものをまとめてみるとおよそ次のようになる。

服部四郎（1964）

ツメタイは身体の一部分の皮膚に不快ではないような冷感覚を与える寒冷を指し，サムイは体あるいはその一部分全体（すなわち深部まで）に不快に属する感覚を与えるような寒冷を指す。服部（1974）では cold を《〔(体全体の感覚）＋（不快)〕～〔(体の一部分の感覚）＋（快～不快)〕》とする。

国広哲弥（1967）

「サムイ／スズシイ／アタタカイ（1）／アツイ（暑)」は体全部の感覚。

「ツメタイ／アタタカイ（2）／ヌルイ／アツイ（熱)」は体一部の感覚。

国広（1981）では「ツメタイは〈体の一部分が感じる冷感〉を指し，サムイは〈体温中枢が感じる冷感〉を指す。〈体の一部分〉というのは，指先であったり，体の表面であったりする」とする。

渡辺　実（1970）

「さむい」の場合は接触感覚がなく，「つめたい」の場合には接触感覚がある。

森田良行（1979）

「暑い／寒い」は「熱い／冷たい」に比べて，はるかに精神的，生理的色合いが濃い。（中略）「暑い／寒い」は身体全体が不快を覚える状態をいうマイナス評価の感覚である。「熱い／冷たい」は，体の表面で感じる温度感覚，神経的な刺激に対する感覚なので，「痛い」などに共通する。

中本正智（1983）

「つめたい」と感じる対象は，ご飯や体のような固体でもよく，水のような液体でもよく，風・空気のような気体でもよい。「さむい」が気体だけに用いられることと対比される。「つめたい」は接触によって温度をうばう側のご飯なり，氷なりの属性であるのに対し，「さむい」は，うばわれる側の表現主体の全身的な温度の状態をいう。

以上，先行の研究ではそれぞれ分類の観点が異なっていることからその定義・規定もさまざまではあるが，「寒い」と「冷たい」とは異なる系統に属するものとして規定されていること，また，この「寒い」系・「冷たい」系に基づく二分類が温度形容詞の分類として基本的なものであることは上記の引用からも明らかである。

2　「寒い」「冷たい」の用法

まず，「寒い」「冷たい」の二語が実際にどのように用いられているかを見てみることにしよう。「寒い」の例は次のとおりである。

〔01〕犬一つ鳴いて通らないこの寒い夜に，何が音を出して丑松の耳を欺こう。（破戒84）

〔02〕散歩もこのごろは野が寒くそれにあたりに見るものがなかった。（田舎教師135）

〔03〕寒い往来は若い男の活気でいっぱいになる。（三四郎237）

〔04〕純一は合札を出して，帽と外套とを受け取って，寒い玄関に出た。（青年138）

〔05〕葉子は部屋の中が暖かなのか寒いのかさえわからなかった。（或る女283）

〔06〕会場のすすり泣きの声は，寒いガランとした廊下を通して，ここにも容赦なく聞こえてきた。（若い人・下152）

〔07〕彼は心から自分の孤独を感じた。それは今，寒い空の下に酔い倒れている乞食の孤独と変わりない孤独だった。（暗夜行路147）

〔08〕「アトリエは寒くていけねえ。二階を借りるぜ。おいで」（斜陽144）

上の用例からわかるように「寒い」は多く季節・夜などの時間的なものを表す語や，場所・地域などの空間的なものを表す語を形容している場合が多い。細川英雄（1985）で「抽象的な空間・時間についていう場合」と規定したものである。ただ，時間的なものといっても，時間そのものを形容しているわけではなく，そうした季節・夜等を空間として捉えているのであるから，むしろ一括して「空間的なもの」とした方がよいだろう。

次に「冷たい」の用例を見てみよう。

〔09〕 筆を投げうって，嘆息して，また冷たい寝床にもぐり込んだが，少しとろとろしたかと思うと，（破戒68）

〔10〕 丑松は頭の方へ回って，両手を深く先輩の脇の下へさし入れた。ああ，蓮太郎のからだはもう冷たかった。（破戒293）

〔11〕 深い井戸の長い吊瓶縄が冷たいから，梅に気の毒だといって，お玉は手袋を買ってやったが，（雁109）

〔12〕 重い冷たい潮霧（ガス）が野火の煙のようにもうもうと南へ走って，（或る女88）

〔13〕 お滝は倒れるように，川岸へ突っ伏して冷たい水をごくごく飲んだ。（温泉宿154）

〔14〕 いそいで食堂へ行き，罐詰の鮭を冷たいごはんにのせて食べたら，ぽろぽろと涙が出た。（斜陽107）

〔15〕 いつになく顔の色が悪い。はじめは秋雨に濡れた冷たい空気に吹かれすぎたからのことと思っていたが，（三四郎66）

以上の用例から，「寒い」に対して「冷たい」が具体的な事物の形容として用いられていることがわかる（比喩的な用法についてはここでは触れない）。たとえば，中本正智（1980）は「「さむい」感覚をもたらすものは，気体が普通であり，液体・固体は，普通ではない。たとえば，「さむい風」は普通であるが，「さむい水」や「さむい氷」などは普通ではない」としているが，上記の用例検討から明らかなように，気体・液体・固体という被形容語の物質的差異をそのまま日本語の温度形容詞の分類の基準に当てはめることは妥当ではない。

もちろん，こうした被形容語の一般的な傾向だけでは捉えにくい用法もないわけではない。次の例はいずれも文学的な比喩表現として用いられているものである。本稿では当面の問題ではないので例を挙げるにとどめるが，こうした比喩と比喩でない場合との境界をどのように考えていくかは重要なテーマである。

〔16〕 山々の真っ黒な輪郭が刃物のように冷たい冬だった（温泉宿187）

〔17〕 土手には笹や草が一面に繁り，濠にはきたない錆びた水が樫や椎の大木の影を帯びてさらに暗い寒い色をしていた。（田舎教師11）

〔18〕 穏やかな夕空に現れ慣れた雲の峰も，古綿のように形の崩れた色の寒い霰雲に変わって，（或る女201）

〔19〕 船の舳の方で氷をたたき破るような寒い時鐘の音が聞こえた。（或る女113）

いずれにしても，以上の被形容語で，「寒い」と「冷たい」とで重複して用いられるものは，後述する「風」及び身体部位の語彙を除いて見られないといってよい。このことは，「寒い」と「冷たい」の意味が重なり合わないことを明確に示すものであろう。

問題は，では，「寒い」は空間的なもの，「冷たい」は具体的な事物をそれぞれ形容する，と規定することが妥当かどうかである。

形容詞が事物・事柄の状態を主体の判断によって表現する語だとすると，「冷たい」の場合は具体的な事物の状態を主体の判断によって表しているとしてよいとしても，「寒い」の場合，そうした空間の状態を表しているものとして規定するのにはやや無理があるように思われる。

たとえば，次のような例を見てみよう。

〔20〕 寒い目の前を静かな馬車や俥が何台となく通る。（三四郎246）

〔21〕 寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾がおろしてある。（雁11）

〔22〕 町々に燈がともって，寒い靄と煙との間を労働者たちが疲れた五体を引きずりながら歩いて行く，（或る女211）

上の例などを見ていると，「目の前」「時」「靄と煙」が「寒い」のではなく，「寒い」のはその感覚を持つ感覚主自身にほかならないのではないか，と思われてくる。このことは，次の例のように，述語として用いられる場合に一人称が表されないという現象とも関わっているだろう。(注1)

〔23〕 堅くなって火鉢のそばへすわって寒い寒いと言う。（三四郎232）

そうしてみると，こうした空間的なものを形容する温度形容詞は，それらの空間の表現を通して感覚主の状態を表しているのであり，それは，述語として用いられる場合の空間の表現を伴わない用法とも「感覚主の状態」を表すと言う点で共通しているのではないか，という考えに至る。(注2)

3 「寒い」「冷たい」の共存

3—1 「風」に関する場合

ところが，「寒い」「冷たい」の二語がいくつかの語を形容する場合に，両者の共存する

現象が存在する。

その顕著な例が，「風が寒い／冷たい」である。

まず「風」を形容する「寒い」の用例をいくつか列挙してみよう。

〔24〕 守屋は廊下へ出た。寒い風が吹きこんできて，暖まった広間の空気をかきまわした。（蒼氷23）

〔25〕 千代子は玄関先の寒い風に当たって大分気も静まった今となっては流石に気まりもわるく，（二人妻54）

〔26〕 寒い西北の風がうしろから吹きつけます。（ある男，その姉の死267）

〔27〕 武蔵野の寒い風の盛んに吹く日で，裏の古樹には潮の鳴るような音がすさまじく聞こえた。（蒲団83）

〔28〕 僕は風の寒いプラットホームへ下り，一度橋を渡った上，省線電車の来るのを待つことにした。（歯車32）

〔29〕 乱れたなまぐさい呼吸を冷たい夜気の中に吐き散らしながら，風の寒い宵の街をさまよい歩いた。（若い人・下376）

「冷たい」の例は次の通りである。

〔30〕 ふるえるような冷たい風に吹かれて寒威に抵抗する力が全身に満ちあふれると同時に，（破戒240）

〔31〕 どれほどの冷たい風が毎日この子の通う研究所あたりまでも吹き回している事かと。（嵐42）

〔32〕 折々何ともつかず秋のやうな心持のする冷い風が濡れた植込の奥から流れて来る時何処ともなく強い椎の花の匂いが鼻につく。（二人妻108）

〔33〕 間崎は冷たい風のようなものが胎内に忍び入るのを感じた。（若い人・下133）

〔34〕 隙間からは剃刀の刃のような冷たい風がシュッシュッと吹き込んだ。（葉山嘉樹・海に生くる人々）

〔35〕 無数の死を築く墓地の方からは，人間の毛髪の一本一本を根元から吹きほじっていくような冷たい風が吹いてきた。（田村俊子・木乃伊の口紅）

たとえば，渡辺実（1970）はこうした「風」の場合について次のように述べている。

「さむい」も実は空気が膚に触れて感じるものなのだが，空気は常に膚に触れているために，接触しているという感覚を伴わないようになっているのである。ちょうどわれわれが日常生活の次元では空気の存在に気づかず，それが一気圧の圧力でわれわれを圧迫していることを忘れているのと同じである。中で風に関しては，

風がさむい。　　風がつめたい。

と両方の言い方が可能だが，風とは空気にほかならないこと，ただし平常の空気とは違って接触感覚を与える空気の流れであること，を思えば納得がゆく。

つまり，接触感覚があると感じた場合は「風が冷たい」であり，感じない場合は「風が寒い」となるということだろうか。そうすると，「空気」の場合は「寒い」が使われるということになり，「風」について接触の意識を持つときと持たないときがあるということになる。しかし，「空気」に関しては用例〔15〕のほか次のような例に見られる通り，「冷たい」専用で「寒い」の例は見当たらない。

〔36〕 冷たい空気に交じる香の煙のにおいは，この夕暮れにいっそうあわれを添えて，（破戒211）

〔37〕 塩気を含んだ冷たい空気は，室内にのみ閉じ籠っていた葉子の肺を押し広げて，（或る女103）

では，こうした「風」を形容する温度形容詞の場合，先行の研究の分類規定はどのように有効であろうか。

たとえば国広（1967）のように「寒い」を体の全部の感覚，「冷たい」を体の一部の感覚と定義すると，「風」の場合は，その時どきによって体の全部で感じたり体の一部で感じたりするということになる。こうした感覚だけの分類規定では「風」等に見られる共存の例を十分説明するには至らない。二語の関係を異なる感覚の表現としてたがいに不可侵の境界をつくってしまうと，こうした共存の例は説明できなくなってしまうように思われる。

感覚として異なるものを，どのようなかたちで表現するかというところに言語としての性格が存在するのではないか。

つまり，「風」の場合の「寒い」「冷たい」の共存現象は，二種の温度形容詞の使い分けの感覚に基づきつつ，表現主体としての話し手がその場によって表現の視点を変更するというように考えることはできないだろうか。それが結果的に両者を併用させるに至ると解

釈することになるのである。

すなわち，「風が冷たい」という場合には，「風」を具体的な事物として捉えるが，「風が寒い」という場合には「風」を空間的なものと捉えている，と解釈するのである。その場合に「風が冷たい」は「風」の状態として，「風が寒い」は〈感覚主〉の状態として話し手に認識されていることになる。一般的には「空気」と同様に，具体的なものとして認識されるため，「風が冷たい」と言われることが多く，「風が寒い」はやや比喩的なニュアンスを伴うことになる。

もちろん，この考え方は生理学的な感覚の面からの説明を否定するものではない。神経の感覚としては，国広（1981）の指摘するように全く別のものとする方が妥当だろう。ただ，本稿で扱う共存現象を説明するためには，表現主体がどのような面から「風が冷たい」「風が寒い」という表現を捉えているか，という問いに対する答えが用意されなければならないだろう。その際に，表現主体の視点の転換という観点を取り入れる必要があるだろうと考えるのである。

「風」の他には，直接文献を調査した範囲では出会わなかったが，こうした共存の例の被形容語として「雨」が西尾寅弥（1972）に挙げられている。調査文献中の「冷たい」の例と併せて次に示す。

〔38〕 寒い雨に濡れながら仕事をさせられたために，その雑夫は風邪をひき，それから肋膜を悪くしてゐた。（小林多喜二・蟹工船）

〔39〕 冷たい雨の降る日だった。（若い人・下15）

3—2 身体部位に関する場合

もう一つの共存現象の例として，

肩が寒い／冷たい，

というような身体部位につく場合がある。(注3) 調査範囲では用例がさほど多くなく重なり合う被形容語はなかったが，やはり西尾（1972）にいくつかの実例が引かれているため，これを参考にした。このほか，中村明（1975）からも引用した。また，この「寒い」「冷たい」の二語が共存するためには，感覚主自身の身体の部位という条件が必要であるが，以下の用例では身体部位に関わる場合ということで他者の身体に用いられているものも含めて示した。

肌

〔40〕 肌が寒く腹がすいた。(伊豆の踊り子92)

〔41〕 降ったばかりの雪のように光を籠めて冷い肌。(円地文子・女坂)

背中

〔42〕 藁の上に横ろむでいると，背（せなか）は寒いが，面や腹は焚火に暖まって，(徳富蘆花・思出の記)

頭

〔43〕「おい，帽子帽子」成程，頭が寒かつたが，振り向も答へもしずに，一生懸命走った。(里見惇・多情仏心)

額

〔44〕 間崎は心臓の端をしめつけられるような息苦しさを覚えた。額が寒く膝頭のネジがほぐれるように感じた。(若い人・下50)

頬

〔45〕 涙がぽろぽろカバンに流れた。頬が冷たいのでカバンを裏返しにしたほどだった。(伊豆の踊り子91)

耳

〔46〕「寒くない？」「ええ少し。霧でお耳が濡れて，お耳の裏が冷たい」(斜陽104)

手

〔47〕 この年齢になりながら，足は炬燵の外に出していた。のぼせ性である。手だけが寒いのだ。(丹羽文雄・厭がらせの年齢)

〔48〕 丑松は氷のようになった手を出して，銀之助にさわった。「まあ，なんという冷たい手だろう」(破戒81)

指

〔49〕 机の上に支えて習いた左の手の冷たい五本の指の当りが，襦袢を通して，濡れて貼ついた蔦の葉のように感ぜられた。(岡本かの子・やがて五月に)

足

〔50〕 足が果物のように冷たい。(平林たい子・施寮)

以上の「寒い」の用例〔42〕〔43〕〔47〕について西尾（1972）は，「「さむい」は全身的に感じられることが多いが，上のような例をみると体のある一部分に感じられることもあり

得ると言えそうに思われる」と述べている。

しかし，前述したように，あるときは体全部，あるときは体の一部，というように，二系統の温度形容詞を連続した感覚として見る解釈はこうした共存の現象を統一的に説明する解釈としては充分でない。

そこで，この身体部位についての「寒い」「冷たい」を「風」に関わる場合に準じて考えてみると次のようになる。

「肩が冷たい」・・・「肩」を事物として捉えその対象の状態とした表現

「肩が寒い」　・・・「肩」を介して感覚主の状態とした表現

ただ，上の「寒い」「冷たい」の用例〔40〕〜〔50〕を見ていくとわかるように，「冷たい」には<名詞・ガ・冷たい>として述語として働く場合と<冷たい・名詞>として連体修飾となる場合の両方があるのに対し，「寒い」には述語用法だけで連体修飾の用法が見当たらない。つまり，自分の身体部位について

肩が寒い

とは言えても

＊寒い肩

とは言えない，ということである。この点は「風」につく「寒い」の場合とは異なっている。(注4)

以上の「寒い」「冷たい」の文における機能を整理してみると次のようになる。

文型／名詞	名詞・ガ・寒い／冷たい	寒い／冷たい・名詞
具体的な事物	冷たい	冷たい
空間的なもの	寒い	寒い
風	寒い／冷たい	寒い／冷たい
身体部位（肩・背中等）	寒い／冷たい	冷たい

しかし，一口に身体部位といっても，「指先」などの身体の末端部に関する場合はやや事情が異なる。

指先が冷たい。

＊指先が寒い。

のように「冷たい」専用だからである。

たとえば，渡辺（1970）は，

また指に関しては，特に物に触れなくても，

指先がつめたい。

とばかりいって「さむい」のほうを使わないのが普通だが，これは指先が人間にとって，接触を最大の機能とするものだからであろう。

と述べている。ただ，この説明では，接触の機能を持つ指先の場合になぜ「寒い」とならず「冷たい」となるのか，という問いに答えることができないように思われる。

なぜ「指先が寒い」と言えないかは，「指先」をもって「感覚主の状態」とはなりにくいからではないか。それは，「指先」を事物として認識するからでもあろうし，「指先」を対象格とした「指先ニオイテ私ハ寒イ」という表現が成立ちがたいということでもある。生理学的には「指先」の一時的な低温化によって身体全体が寒さを覚えることがないわけで，そのことが，言語の点からみると「感覚主の状態」として捉えられることがないことにもなる。前掲の用例〔46〕に見られるように「耳が冷たい」とは言うが，「耳が寒い」とは言わないことも同じである。その身体部位を身体全体の寒さとしては捉えがたいと感じた場合，あるいは自分の身体の一部ではあるが一つの事物として客観的に捉えやすいような場合，この「冷たい」専用現象が生ずることになるのではないか。

4　結　論

以上，「寒い」「冷たい」を中心に温度形容詞について考えてきたことをまとめると，およそ次のようになる。

表現主体が，ある温度の状態を捉える際には，次の二通りがある。

一つは，具体的な事物として対象を捉えそれを「対象の状態」として表現主体の判断において認識する場合であり，これは「冷たい」と表現される。(注5)

もう一つは，感覚主を取り囲む空間的な状況を介して「感覚主の状態」として表現主体が認識する場合であり，これは「寒い」と表現される。

この二系統の存在が「寒い」「冷たい」の使い分けの基準と考えられるが，「風」や身体部位に関する場合には，その認識の仕方の転換によって二系統の形容詞が同一の被形容語について共存することがある。すなわち，「風が冷たい」は「風」を空気の流れの事物として捉えた「対象の状態」の表現であり，「風が寒い」は「風」を空間として捉えた「感覚主の状態」の表現であるといえる。身体部位における「寒い」「冷たい」の共存も基本的には「風」の場合と同じように考えることができる。

おわりに

温度形容詞の意味分類としての従来の客観性形容詞・主観性形容詞の二大別の境界はきわめて曖昧で，実際に形容詞の用例に当たってみるとその所属に迷うものがかなり多い。とくに感覚・感情表現に関わる形容詞にはそうした困難がつきまとっている。(注6)

本稿では，こうした感覚表現に属す温度形容詞の中の「寒い」と「冷たい」の二語を中心に取り上げたが，このことは基本的には「寒い」系（暑い・暖かい・涼しい・寒い）と「冷たい」系（熱い・温かい・ぬるい・冷たい）の二系統の問題として温度形容詞全体に適用できるだろうと思われる。諸語の各々の性格や意味については別稿に譲らねばならないが，「感覚主の状態」と「対象の状態」という温度形容詞の分類・規定を手がかりに日本語の形容詞全体の意味分類の一つの方向が見出せないだろうかと考えている。大方の御教示を仰ぎたい。

注(1) 国広（1967）の言う「第一人称者の状態」と共通する面を持っている。

(2) 終止用法における「寒い」「冷たい」を比較すると，「寒い」に終止用法が多く，とくに主語不明示や「は」によって連体修飾で指摘した空間的なものを表す語を取り立てる例が多く見られる。それに対し「冷たい」では「が」の多用される傾向がある。

(3) 中本正智（1980）には次のような説明がある。

「寒い」は，温度をうばう作用をする風を主体として，「風がさむい」ともいえると同時に，全身の温度がうばわれていく部分を主体として，「足元がさむい，背筋がさむい」ともいえる。

(4) なぜ「寒い肩」と言えないかは，「寒い」と感じるのが感覚主自身であると同時に「肩」は感覚主自身の身体の部位であるためで，二重の「私」の不自然さゆえと考えられる。

(5) 影山太郎（1980）は「冷たい」を「物自体の温度を客観的に示す語」とするが，本稿の立場は「冷たい」の認識には表現主体の主観が深く関わっているとするものである。したがって，客観的な事物の状態として表現主体は「冷たい」を表現しているわけではない。たとえば，「重い」に対して「重たい」があり，「ーがる」は「重たい」にしかつかない。「冷たい」の場合は「寒い」に比べてつきにくいとは言えるが，つかないとは言えない。そうしてみると，客観性と主観性との間で形容詞は段階的に分化しているというように考えることが妥当なのかもしれない。

(6) 山口仲美（1983）参照。

引用資料（本文中の引用には作品名及びページ数を示した。著者名・作品名の形で示したものは，西尾（1972）・中村（1975）よりの引用例である）

a芥川龍之介・歯車・岩波文庫／a有島武郎・或る女・角川文庫／d太宰治・斜陽・角川文庫／i石坂洋次郎・若い人・新潮文庫／k川端康成・伊豆の踊り子・岩波文庫／同・温泉宿・岩波文庫／m森鷗外・青年・岩波文庫／同・雁・岩波文庫／n永井荷風・二人妻・岩波文庫／n夏目漱石・三四郎・角川文庫／同・それから・角川文庫／s志賀直哉・ある男，その姉の死・岩波文庫／同・暗夜行路・角川文庫／s島崎藤村・破戒・岩波文庫／同・嵐・岩波文庫／t田山花袋・田舎教師・角川文庫／同・蒲団・岩波文庫

参考文献（著者別五十音順）

影山太郎（1980）『日英比較 語彙の構造』松柏社

国広哲弥（1967）『構造的意味論』三省堂

――　（1981）『日英語比較講座3意味と語彙』大修館書店

中村　明（1975）『比喩表現辞典』角川書店

中本正智（1983）『日本語の表現と構造』エポナ出版

西尾寅弥（1972）国立国語研究所『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

服部四郎（1964）「意義素の構造と機能」（「言語研究45」）

――　（1974）「意義素論における諸問題」（「言語の科学5」）

細川英雄（1985）「現代日本語の温度形容詞について」（「信州大学教育学部紀要53」）

森田良行（1978）『基礎日本語Ⅰ』角川書店

山口仲美（1983）「感覚感情語彙の歴史」（『講座日本語学4語彙史』明治書院）

渡辺　実（1970）「語彙教育の体系と方法」（『講座正しい日本語4語彙編』明治書院）

＊本稿は早稲田大学国語学会9月研究会（昭和61年9月27日）での研究発表をもとにしたものである。参会の方々からは多くの有益な助言をいただいた。とくに森田良行先生には懇切な御教示をいただき，拙論中に活用させていただいた点も少なくない。記して謝意を表する次第である。